

KI News & Topics

Irregular Newsletter vol,11



大木記念女性のための菊池がんクリニック・ストレスケアセンター
〒359-1133 埼玉県所沢市荒幡111-1 Tel/04-2928-7311 Fax/04-2928-7306

ドラッグ・ラグについて

医療の現場からの提言

昨年11月に発刊されたYakugyo Jihō(薬業時報)に菊池がんクリニックが紹介されました。

当クリニックは、大病院等の大きな病院でできる治療を尽くされた再発がんの患者さんや抗がん剤に耐性となった患者さんが、最後の砦として訪れるところ、と紹介されています。がんの初発の標準治療は済んでいるため、さらなる患者さんの病状に合わせた治療が求められますが、そのために未承認薬や保険適応外の分子標的薬を用いた治療を行っています。

しかしここで、大きな問題として立ちふさがるのが「ドラッグ・ラグ」。今回はこのドラッグ・ラグについて取り上げたいと思います。

当クリニックの特色の1つに外来化学療法での治療を行っているということでしょう。「入院するより生き生きと生活できる治療環境を。」「入院治療では得ることのできない、日常の喜びががん患者には必要。」というのが院長の信念です。

そのためにも、患者さんの病状にあった効果の高い、副作用の極力少ない治療を実現するには、保険適応の医薬品だけでは不可能で、未承認や適応外薬の分子標的薬を使

用することが必須となっ
ていきます。

しかし、保険適応内の治療や医薬品を使う場合は保険診療でできますが、未承認薬や適応外薬の分子標的薬を使えば保険が使えず、すべて自由診療扱いとなってしまうます。保険診療と自由診療の混合は不可能なわけ
です。ここで大きな「経済的な問題」が重く患者さんにはのしかかっています。

「ドラッグ・ラグ」つまり、新しい薬が開発さ

れても、承認され使用できるようになるまでに時間がかかる、または海外ではすでに使用され治療実績もある薬が、なかなか国内では認可されない、など。このドラッグ・ラグの問題が解消されれば、患者さんの経済的な負担は大きく軽減され、治療の可能性も拡大することが期待できます。

今、中央社会保険医療協議会(中医協)や厚生労働省の検討会議で、ドラッグ・ラグ解消に向けた取り組みが進められています。菊池院長いわく「日本には未承認薬が多すぎる。これは政府や厚労省の医療費抑制策がそもそもの大きな原因。そのため日本の製薬企業は世界に遅れをとっている」と。

未承認薬も、当クリニックのようなポリシーの医療機関で使用され治療実績が上がれば、より承認されやすくなるかもしれません。そういう意味でも当クリニックの役割は

大きいと感じますが、薬の認可の速度が医療の現場の実際に追いついていないのが現状です。そこで大切になってくるのが、医師がどれだけ薬や新しい治療法について勉強しているかということ。菊池院長も埼玉県医師会で発行している会誌(別冊)の中で、日進月歩する医学に、保険診療で決めた点数に従って治療していれば充分と考える患者さんが出てくる、と医療側の問題点を指摘しています。

中には、薬に関して薬剤師に任せきりの医師もいます。反面、更なる技能向上のためがん治療専門医の資格を取る医師もいます。それぞれの医師の信条、情熱といった面が係わってくる部分でもあると思えますが、医師個人レベルだけでなく、制度の面からも「ドラッグ・ラグ」解消の取り組みを支援していくことが大切ではないでしょうか。